

奇しき邂逅

アルフユース・ハーディー氏玄孫

ニコラス・プラット氏との不思議な出会い



西邨辰三郎

(一)

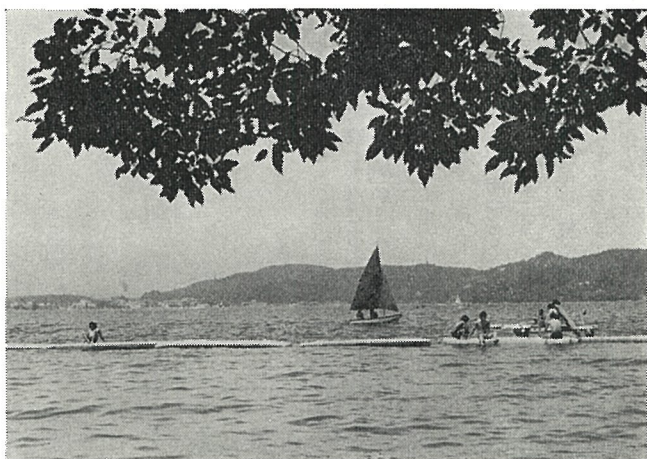
いくたび訪ねても、世俗化の一地区を除けば、野尻はよいところである。わたくしは、夏にいちばん長く滞在する。真夏の湖畔は、爽快で愉しく、変化に富む山々が美しい。とくに湖上が賑やかで、カラフルに躍動する。やがて、早い秋が訪れると、あたりは火の消えたような静寂にかえる。ときおり濃い霧を運ぶ冷たい高原の風は、楓や槲や、クスギや、いろいろな雑木林をさまざまな紅や黄に彩る。このような高原の秋の陽気な饗宴は、しきり

にわたくしを招くけれども、秋は行事が多くて長逗留はできない。妙高や黒姫に初雪が降る頃には、眩しい紅葉は朽葉となる。それらをサクサクと踏みしめながら、わたくしは、いつも足早にやってくる深い雪と氷の厳しい野尻が、近いことを思うのである。土地の人は、湖水を割ってのわかさぎの釣は楽しいというが、それには耳を貸さず、わたくしはここを去り、冬は滅多に來ない。だが厳しい冬の野尻は、人間の靈肉を鍛える恰好の場所となり、妙高、黒姫などは、スキーヤーで賑わうそうだ。

(二)

野尻の春は遅い。しかし五月中旬ともなれば、北欧のうるわしい五月のように、さわやかな新緑のシーズンとなる。高原の微風に揺れ動く新緑は、小波をうったり、音をたてたりして、交響曲のように歌うのである。くぬぎ、からまつ、あかしや、白樺などの、目醒めるような色や薫は、それらをよるこぶ野鳥の啼き声とともに、わたくしを果てしない夢の国へと誘う。六月ももちろんよい。

主題にも似ず、わたくしはすこし野尻の自然に酔い過ぎたようだ。しかし野尻がわたくしを誘引するのは、緑の山や湖水などの広大無辺な恵みだけによるのではない。野尻には蕪雜なこの世の煩瑣から解放された自由人の集りが、いつの間にかできあがり、お互いに心おきない交わりを楽しむことができるからだ。それはまことに人生の悦楽というほかはない。人生を憚ることなく創造し、更生し、リクリエイトするためには、大自然を背景の共同地域生活、西洋流に表現すれば、自然を身近かに、ルールを守るこのようなコミュニケーションが必要なのではないか。



夏の野尻湖畔

転じたのである。それは山と湖に恵まれた故国カナダへの郷愁であったかも知れない。つづいて心ある内外人が、野尻の神山——うっそうと茂る森林で、紺碧の空や湖を樹の間から散見できる景勝の丘に、素朴でシックな山荘を建て始めた。今では、ロジ風の教会を中心に、水泳場、テニスコート、ゴルフ場等の設備まで持つ豊かな国際村に発展したが、最初の理想どおり、野尻湖畔でもこの村だけは、自然環境がよく守られて、美しい森や林の中に、人の心に語りかけるような思い思いの山荘が、点在しているのである。

(三)

昨年三月いっぱい、定年を迎えたわたくしは、人生を再出発すべき希望と覚悟をもって、新年度を迎え、つづく夏の休暇には、いまだかつて経験しなかった雑務からの解放感と、これからも人生を精いっぱい享受させてもらいたい「新生の折り」にも似た心境で、この野尻神山の国際村に、娘や孫たちと滞在していたのである。同志社

の理事長斎藤三雄夫妻、神学部の深田未来生教授、米国バプテスト教会のシモノ音楽宣教師、名古屋金城学院の理事ジョン・マカルピン夫妻、その他多くの友人と交誼を深め、思わぬ恩恵を受けたのも、実にこの期間であった。日本の讃美歌をたいへん愛した詩人マカルピン夫妻も、定年で、近く帰米されることとなり、夫妻が愛惜して止まらなかった美しい山荘を、どの人よりも讃美歌好きの君へなら渡ししよう、といって、きわめて好意的に譲渡してくれたことや、シモノ宣教師との邂逅によって、京都に新しくユネスコ合唱団を組織する段取りができたことなども、わたくしにとっては、全く予期しなかった野尻の夏の恩恵であった。

(四)

しかし、それらにまして不思議と思われる邂逅が、わたくしを待っていた。それは八月のある心地よい朝、わたくしはマカルピン師との要件で、国際村の一管理者、小林工務店主を訪れた。するとほとんど時を同じくして、一人のアメリカ人らしい中年の紳士が、サンサンと朝陽を浴びる庭先を横ぎ

こうした目的のために、最初に野尻を開拓した人に、カナダの宣教師ダニエル・ノーマンとマック・ウィリアムがあった。彼らは避暑地の軽井沢に水のないこと、また次第に俗化してゆくことを嘆いて、大正中期に野尻に

った。すれ違いざま、土地の良習慣が身についている二人は、「お早うございます」と言ってから、何かの勢で、互いに「どちらから？」というようなことを言ったように思う。その時、彼は、「駐日アメリカ大使館一等書記官ニコラス・プラット」であることを名乗ったが、わたくしが、「同志社の教師」であることを述べる、瞬間、彼は大きな声をあげて、「同志社ノ」と叫び、首を斜めにわたくしの手を握りしめ、さらにそれを上下左右にふりながら、「ぼくの父の母のグラントファミリーは、新島襄を助けたアルフュース・ハーディーですよ。」と、ちらんと輝く碧い眼で、わたくしを凝視した。

二人の驚嘆と歓喜は、ひととおりのものではなかった。「同志社ノ」と叫んだ彼の興奮もさるものであったし、わたくしもまた近來にない感激を覚えた。

その日の午後、わたくしどもは、同じ国際村にあるニコラス・プラット氏の山荘で再会した。ミセス・プラットに出迎えられ、三人のかわいい子供たちにも会った。やがて手づくりのクッキーが皿に盛られ、温かいブルーマウンテンのコーヒーが注がれた。聞けば一

家は大的音楽好きで、ニコラスさんは、ハーバード大学のグリークラブのメンバーであったことなどから、わたくしどもは、いっそうの親近感を覚えた。冬は長くて厳しいニューヨークランドの風物が、野尻のそれとよく似ていることや、ハーバードを通して、多くの共通した友人のいることなども、楽しみに話し合った。柳家悦氏と親しかったフォッグ美術館の館長ラングドン・ワナー博士のことや、ライシャワー元駐日大使のこと、またわたくしの同志社大学時代お世話になったシャイベリー博士の令息が、東洋美術の有名な研究家である話なども、自然に出たように思う。また二十年前、ボストンやアーモストを訪問したときの思い出話などをしていううちに、家族ぐるみで親しくなってしまった。今度東京へ出たら、米国大使館を訪い、いっしょに「さくら」で食事をしよう、などと挨拶をうち交わして、退出したのである。その翌日であったか、日曜日には、国際村の教会で、斎藤理事長とも会見される機会をつくったが、それでも、プラット氏はうれしそうに始終笑顔で応待し、来るべき九十九周年の創立記念日には、ぜひとも同志社に行きたい、

このことであった。

(四)

その後、わたくしは京都に帰り、久方ぶりに数冊の新島伝記を読み直した。いまさらながら、どの本からも不思議なインスピレーションをもらった。とくに裏が長い航海の末、ボストンに到着し、ワイルド・ロバーの名船長テイラーの介添で、船主アルフュース・ハーディーと初対面するあたりは、伝記の中でも、もつともドラマチックな一齣である。

ニューヨークランドには、いままなお、大西洋を渡って、この辺境に到着したピューリタンの自由と、自治の開拓精神が流れていると言われているが、たしかにアルフュース・ハーディー夫妻のごときは、その代表的人物である。良心の自由と、愛と平和が、アメリカ建国の大精神というならば、ハーディー夫妻のごときは代表的アメリカ人ということができ得るであろう。そのおかし難い威厳の中に、やさしい愛情を秘めた清教徒らしい風貌は、写真からでも一目瞭然だが、彼の伝記を読むと、いっそう彼らの立派な人間像の由来がわかるのである。ニコラス・プラット氏の風貌



ニコラス・プラット氏

の賜物であったと思う。

(内)

十一月の末日、都ホテルからわたくしの家に電話があった。不在中だったので、帰るなりホテルへ聞き質すと、まぎれもないプラット氏の声である。なつかしかった。おりから、フォード米大統領訪日の最中ではあるが、京都のプログラムが終り、随行の彼は、ホッとしたところらしい。滞日スケジュールの重大責任を荷っている彼は、同志社の創立記念当日には、任務の都合で訪問できなかったこと、大統領が日本から韓国に向って離陸後の十二月二日には、ぜひとも同志社へ表慶訪問したいから、よろしく頼む、という内容であった。わたくしは早速、住谷総長に架電したが、総長は東上中であり、服部庶務部長が代行して、すべてのアレンジをしましうとの返事であった。

約束通り十二月二日のあさ、プラット氏とわたくしは、野尻以後四ヵ月ぶりの再会を喜こんだ。フォード大統領を無事韓国に送った

安堵感もあつてか、上機嫌である。同志社大学は、おりから騒然とし、本部も閉鎖されていたので、服部部長の計らいで、栄光館の女子大学長室に彼を案内した。彼は栄光館にはいると、ファウラー氏の肖像画や、ミス・デントンのために贈られたパイプオルガンを感じ深げに眺めながら、学長室に入り、越智学長の歓迎を受けた。同志社の歴史的記録や写真などを食いつくように眺めながら、彼は、同志社について、いろんな質問をした。欲談中、香里出身の松本潤一郎君が、記念のために、いろいろのスナップをとってくれたのがあるがなかった。社史史料編集所の青木正太郎氏の案内で、新島遺品庫にも入れてもらったが、資料の整理中で、ほんの一部分よりお見せすることができないのは残念なことであった。それからわたくしたちは、煉瓦建築として、重要文化財の指定を受けたチャペルに入り、歴代総長の肖像画や、荘重で、単純で、機能的なチャペルの構造のことなどを話しながら、校長室へ案内され、信楽校長から、茶菓の接待を受けた。ここの中学校では、歴代の校長が、新島伝の講義をしていることをプラット氏が知ると、たいへんな喜びようで、

にも、何かそれに似たものを感じるが、違っているであろうか。歴史や環境や血統は、争えないものだと思う。

野尻の国際村で、有形無形の賜物を得たことは前にも述べたが、ニコラス・プラット氏との奇しき邂逅によって、もう一度新島先生を偲び、ひいては同志社教育の使命を考量し、またわが人生を考え直すべきインパクトを与えられたことは、何にもまさる、夏の野尻で

今後もそうして欲しいと言っていた。

新島旧邸では、友人大江直吉兄や田中正三兄の案内で、館内を隅なく見せてもらったが、プラット氏は、黙々とあたりを見回しながら、ひとしお感慨に耽^{ひた}っていたようだ。

京都ホテルでは、斎藤理事長や服部庶務部長が、同志社を代表して、心からなる歓迎の意を表したが、プラット氏は、これらに対し、丁寧なお礼の言葉を述べ、来年の百周年には、きっと来る、と約束して、無事その日の同志社訪問を終えたのである。わたくしもうれしかった。

(七)

想えば、はじめは野尻での、ふとした出会いであった。あの時二人が、野尻湖畔でも、とくに国際村の良識に背いて、朝の挨拶をしなかったら、それはそれまでのことであり、プラット氏も、ただの路傍の人に過ぎなかったかも知れない。けれども野尻の自然や生活は、いつの間にか、頑^こくな人間関係を、親密な人間関係に変化させる不思議な力をもっていた。

不思議といえば、野尻では全く予期しな

ったあの邂逅が、このように発展してゆく状態は、これをキリスト教的にいうなら、神の摂理、仏教的な表現をかりるなら、不思議な因縁ともいふべきものであろう。わたくしども同志社人が近く創立百周年記念日を迎えると、心を合わせているのも、その昔、アルフース・ハーディーと新島襄との奇しき邂逅が、実にその一大遠因となっていたのではないか。

わたくしどもが、同志社を中心に、かくのごとくいま生かされているのも、もろもろの因縁が、組み合わされていることであってみれば、ただありがたいというほかはない。例年夏の、あの美しい野尻での生活が、いな、わたくしの全生活が、神への讃美であり、感謝であり、応答でありたいと、いましも切に希うのは、年齢のせいであろうか、はたまた同志社教育のおかげであろうか。その他、あまり理屈はいいたくない。すべては、ただありがたいばかりなのである。

(香里中高囀記講師・社会)

*

*

新島襄研究参考図書

My Younger Days

同志社校友会

新島先生書簡集(森中章光編)

同志社校友会

新島先生書簡集一統(森中章光編)

同志社校友会

新島襄書簡集(同志社編)

同志社校友会

新島襄先生(徳富蘇峰著)

岩波書店

新島襄一人と思想(魚木忠一著)

同志社出版部

新島襄(岡本清一著)

同志社出版部

新島先生と徳富蘇峰(森中章光著)

同志社

同志社九十年小史

(同志社々々料編集所編)

雑誌「新島研究」

同志社

新島襄(和田洋一著)

同志社新島研究会

※比較的参照しやすいものを掲載
日本基督教団出版局

わが同大法学部と「戦後」

加藤 正男



明治百年といわれ、同志社百年という。昭和も、ここに五十年。「昭和史」や「戦後史」はいま、一つのブームらしい。以下では、当年五十歳の一「同志社人」が、わが同志社大学法学部と「戦後」に関わる一端を、まったく推蔽のないわが『ウタ日記』により、気随に列べてみる。

「戦後は終りぬ」という人あれど

二千年来の戦争をみたり。

わが年齢の新島は疾く天に在りき

余命の分際を彼の如く始動せむ。

「学徒出陣」から「復員」の直後のある日、公私に渡る吾が恩師、田畑忍同大名誉教授との話題が、母国の復興のことに及んだ一瞬、剛毅と座談上手で鳴る先生の絶句、男泣きを目の当りに見た。

くに敗れ、師の慟哭をついに見て
「日本の良心」を確め得たり。
若き兄ら鴻毛より軽く見罷りぬ
原稿のなかばに瘞はさみて。
荒れ果てし夕陽のチャペルにたちつくし
軍服のまま「福音」を聞けり。
死の灰の上りて黒き雨ふりぬ
被爆の民ゆえ我ら抗がう。
わだつみの声に答えん残生を
わが攻守し得る領海はありて。
戯れにイエーリングの「変身」と
称する師の筆すこやかにあり。

私の専門上の指導教授、末川博立命館名誉総長は、一八九二年生まれ。同九二年に死歿したドイツのイエーリング先生の、あるいは「生まれ変わり」なのかもしれない

い。

今日までの私に、少しでも学績ありとすれば、その最大の原因は、良き師に恵まれた点だ。竹田省、石田文次郎、後藤清、谷口知平先生のほか、専門外でも田村徳治、恒藤恭、滝川幸辰先生などは、私にも高い山々である。むろんわが恩師は、右記に限らないが、つぎのわが「ウタ」は、右のうちの先生に関わるでしょうか。急がぬ読者よ、御笑判あれ。

芥川と法理の君は天稟の

知の詩を磨き 死してなお生く。

「六法」を拝して講義を始めたる
師の理わりは整いてあり。

前後二度、「京大事件」の主役たる

応報史観を問いそびれたり。

師を牛の涎れと評す人あれど

牛、亀の知恵は童話にも在り。

階段を兔のごとく馳け昇り

息切れもなきあの日の老師。

敬老の日の師や事の多過ぎぬ

何もて答えん才なきわれは。

わが研究室の窓から、ときに「同志社銀座」(今出川キヤンパス)を下に見つ、現代法と社会の断面をかいま

み、思う。

アニマルの国、豊かにて、我れ貧しき
勤労感謝の日は暮れゆきぬ。

新幹線 沖繩博は一位なりや
GNPの三位におこるまじ。

水俣の告発のみが生き甲斐と
麻痺の処女は多くを語らず。

老人の日のこの老婆に冬長し
標繩を飾る床はあれども。

「中ソ論争」初期の頃だった、去る年の冬期、私はモスクワ大学法学部の交換教授として、彼の大国などに「学を留め」てきた。超大国をめぐる法律と政治の一面を、肌で感じた気がする。

あこがれのレーニンの学都にいま立てり

氷の山河を越して来つれば。

地吹雪に学を留めて別れ来し

トルストイのむら、ゴリキーのまち。

「批孔・批林」、スターリンらも難ぜらる

必然則に逆がい得るや。

北風がウォール街を捉えたり

福神像、笑み失業者溢ふる。

「四次防」の不当を論ず我が文を

外つ国知らずと難する人あり。

大国が分断の民に敗れたり

有史以前の罪を残して。

ここ数年来の大学騒動は、われら「戦中派」世代にとつては、晴天の霹靂。世界に冠たる「全学連」も変わった。「いまどきの若い者」も。

わが部屋を封ぜし君らも由あれど

マルクス読まずやレーニン読まずや。

ビラ配りの初出の日のキャンパスに
血み泥で呻く学生、君は。

「東大」の傲りは読みて飽きたれば

全大学を「TODAI」と呼ばんや。

雲降るに職場衣のまま夜学生、君は

パンかじりつつ校内を急ぐ。

思いつめし声、朗々と夜学生ら

私学助成を訴えて集う。

盲い娘が学園劇に演じたり

友を励まし清らかな声して。

先頃、同門・同世代のノーベル物理学者、江崎玲於奈氏から、ある問題についてご意見を聞く栄を得た。門外

漢ながら、多くの点で、感銘を受けた。

ダイガードとソフトウェアの理わりに
秀でし民の証しを得たり。

大臣らも平和の勲を賞でられて

核、拡散し彼の日も暮れぬ。

常の如く嘆息しつつ筆をおく

文化の日のわが夜は更けゆきぬ。

モムゼンのローマ法理論にも評ありて

驚馬の氣負いは見苦しと思つ。

昭和五十年と馬齢を同じくし、先年、同志社の永年「精励」者に列せられた私は、も早、「四十九の非を知る」べきときだろうか。

良心碑にわが身を恥じぬ人ありや

新島ありせば何をか言うらん。

身に余る学問創りを分け担ひ

ともに競いて未来に生くこそ。

(大学法学部教授・民法学)